

服部四郎氏の元朝秘史パスパ字本原典説について

中村雅之

1. 服部氏のパスパ字本原典説

『蒙文元朝秘史(一)』「序」(1939)等によれば、服部氏はまずモンゴル語における γ /q (服部氏の表記では γ / χ) が13～14世紀において別の音素であったことは諸方言の比較によっても疑いないとする。そして、元朝秘史の漢字音訳において、d/t、j/c、g/kを書き分けるのと同様に γ /qの両者を書き分けることは極めて容易であったにもかかわらず、実際に書き分けていないのはパスパ字本によったからであるという。これが世にいう「パスパ字本原典説」である。

これに対していくつかの反駁もなされたが、服部氏はいずれも‘言語学的な’反証がないとして、自説を固持した。かくてパスパ字本原典説は‘言語学的な’宿題として、60年以上を経た今なお我々の前によこたわっている。本稿は、モンゴル学に大きな足跡を残した学者への敬意を込めて、長年の宿題を果たそうとする試みである。

2. 概況

モンゴル語の γ /q/k/g (古典期文語に対する通行のローマ字転写による) について、歴代の資料では以下のような表記上の区別(あるいは不区別)がある。(漢字音訳においては母音 -a/-e を伴った形を例示してある)

	γ	q	k	g
パスパ字 1269～		q	k [‘]	g
至元訳語 13世紀後半		合	可	(骨)
華夷訳語(甲) 1389		^ㄱ 合	客	格
元朝秘史 14世紀後半		^ㄱ 合	客	格
韃靼館訳語 15世紀?		哈	客	格
盧龍塞略訳語 1610刊		哈	克	格
登壇必究訳語 1599刊	噶	哈	克	革
武備志訳語 1621刊		哈	克	格
満蒙漢三合切音清文鑑(満洲文字) 18c.	G	h	k	g
蒙語類解(ハングル) 18世紀後半	g	h	k	g
現代モンゴル語(ハルハ方言)	r	x	x	r
カルムイク方言(ラムステッドの辞書)	G	χ	k	g

3. 漢字音訳における γ /q

議論のありかを明確にするために、一般論から始めることにする。ある言語に固有の文字

で他の言語を表記しようとする時、(1)両言語にほぼ共通する(対応させる)音素があって表記に困らない、(2)相手の言語が有する音素をこちらが持っていないために何らかの工夫が必要、の二つの場合が考えられる。

前者は特に問題とならない。後者の場合には、(a)異なる音素を一つの文字で表記する、(b)相手の言語に特有の音素を表記するために新たな表記法を考案する、の二様の対応が可能である。

日本語のカタカナで英語を表記する場合を例にすると。次のようになる。

(1)英語の「she」「shin」に対して、「シー」「シン」の表記を与える。

(2)英語「sea」「sin」に対して、(a)「シー」「シン」、(b)「スィー」「スイン」の表記を与える。

つまり、(a)を採用すると(1)(2)は同一表記になる。(b)は通常の日本語には使用されない表記を外国語用に考案したもの。

これだけならば、(b)は非常に理にかなった表記に見える。問題は、

(3)英語の「thin」

をどう表記するかである。(a)の方法では当然「シン」となって(1)(2)と同一表記となり、ある意味では非常に明快である。さて(b)の場合は、本来その原則から言えば、(1)とも(2)とも異なる表記を考案するべきかも知れない。しかし実際には(2)と同一の「スイン」が用いられるであろう。

この現象は次のように一般化できる。ある言語に固有の文字で他の言語を表記しようとする場合、他の言語の音素に対して文字数が不足する時には新たな表記を考案することが可能だが、そのような音素が複数あるならば、それら全てを表記し分けることは必ずしも現実的ではない。すなわち、新たに考案した表記は在来の音素とは異なる音素であることを示す点においてのみ有効なものである。

カタカナ表記における「スイン」は、「シン」とは異なる音であることは明示しうるが、もとの語が「sin」であるか「thin」であるかはこの表記からはわからない。ここで「thin」のためにさらに別の表記を作り出すことは理論上は可能ではあるが、実際に発音し分けられなければ単なるゲームとしてしか意味をなさない。

前置きが長くなったが、至元訳語は上の(a)の方法を採用し、元朝秘史および華夷訳語は(b)の方法を採用したわけである。

(1)中期蒙古語の「ha」に対して、至元訳語「合」、元朝秘史「哈」

(2)中期蒙古語の「qa」に対して、至元訳語「合」、元朝秘史「^ㄊ合」

(3)中期蒙古語の「 γ a」に対して、至元訳語「合」、元朝秘史「^ㄊ合」

これらの中で「ha」は漢語にもほぼそれに対応する音があった。「qa」「 γ a」の2音はそれに対応する音がなかったため、秘史では新たな表記法を考案した。その際、漢語にない2音を表記上区別することに意義を認めなかったため、秘史では同一表記「^ㄊ合」になった。

つまり、 γ /qの書き分けは服部氏が考えたように「極めて容易」な状況にはなかった。服部氏は、元代の標準的な漢語において喉音の有声[γ]と無声[χ]の区別が存在したと考えて

いたため、それらを中期蒙古語の γ /q にそれぞれ容易に対応させようと考えていたようである。しかし、諸資料から見る限り、当時の標準漢語には有声の [γ] は存在しなかったと思われる。かつて唐代には存在したその音素は既に無声化して [χ] ないし [h] になっていた。したがって容易に対応させられる中期蒙古語の音素は /h/ のみであって、他の二つ /q/ と / γ / は、漢字音訳においてはその音価のいかんにかかわらず対応が極めて困難な音素であったと考えるべきである。

それでは登壇必究訳語において γ a /qa が「噶」「哈」によって書き分けられているのはなぜか。それは恐らく、この時代にはすでに蒙古語の /h/ が消滅していたからである。つまり、喉音における h /q / γ の 3 項対立が q / γ の 2 項対立へと変わっていた。そして /qa/ の当時の音価は [χ a] であったと思われるから、漢字音訳においては「哈 [ha]」を対応させるのは比較的自然的なことであった。そこで残る / γ a / [Ga] に対応する表記のみを「噶」として新たに考案したのであろう。

4. パスパ字表記における γ /q

パスパ字表記においても、問題の在り処はほとんど漢字音訳の場合と変わらない。中期蒙古語の γ /q はパスパ字では区別されずに \square 「q」で表記される。

パスパ字はチベット文字に基づいて作られた文字である。中期蒙古語を表記するパスパ字のうち、そのほとんどはチベット文字に由来を求めることができる。しかし、 \square 「q」は新たに考案された文字で、チベット文字には存在しない。中期蒙古語の γ /q に相当する音素はチベット語に存在しなかった。そのために新たに文字を考案する必要があったのである。その際、 γ /q の双方に対して新たな表記を考案しなかったのは、ちょうど漢字音訳の場合と同様である。

漢語から見た場合には、中期蒙古語の h /q / γ がよく似た音素として映ったのであったが、チベット語から見た場合には、恐らく - γ - / γ /q がそのような音素であった。その中で、チベット語で比較的無理なく対応させられる音素は - γ - であり、これにはチベット文字で有声の h を表す文字 \square 、すなわちパスパ字の \square 「 \cdot 」が当てられた。先古典期文語（および古典期文語）で記される語中の - γ - は長母音や二重母音の表記に用いられる。（ただし - γ - が有声の口蓋垂摩擦音であった可能性もあるが以下の議論には支障がない。）チベット文字で、他言語の長母音や二重母音を表記するときには、有声の h（チベット文字の転写で '」）を用いるのが通例であった。敦煌資料でも漢語の [-au] [-ei] はチベット文字で「-a' u」「-e' i」と表記されている。したがって、中期蒙古語の長母音や二重母音にも、この有声の h に由来するパスパ字「 \cdot 」を用いて「a \cdot ula」のように表記するのは自然なことであった。

残る二つの音素 γ /q に対しては、 \square 「 \cdot 」を変形させて新たな文字 \square 「q」を考案した。ちょうど漢字音訳において h を表す「合」や「哈」の変形として「^h合」が生まれたのと同様である。そしてパスパ字において γ /q を書き分けられないのも、漢字音訳の場合と同様に、もとの言語で発音し分けられない音に対して新たな二つの表記を作ることに意義を認めなかったからだと思像する。

5. 小結

以上をまとめれば、次のようになる。

- ①パスパ字ならびに秘史漢字音訳において γ/q が区別されないのは、それぞれチベット語および漢語に、 γ/q に対応させうる音素が存在しなかったからである。
- ②したがって、漢字音訳が仮にパスパ字の影響を受けなかったとしても、双方の資料が同様に二つの音素 γ/q を区別しないことはありえたものと考えられる。

6. 「傍訳」と秘史の成立過程

前稿（「漢字音訳本『元朝秘史』の成立について」『KOTONOHA』4号）において論じたように、現行本に見られる「傍訳」は漢字音訳本文よりも前に成立していたと考えられる。つまり、①「ウイグル文字本文」→②「ウイグル文字本文＋傍訳」→③「漢字音訳本文＋傍訳」という順番で成立した。（今「総訳」は無視する）

パスパ字本原典説をとるならば、②と③の間に「パスパ字本文＋傍訳」が割り込むことになるが、それはあまりにも不自然である。

7. 「都^𑖀児」と「突^𑖀児」の書き分け――栗林説による

栗林均氏の「『元朝秘史』と『華夷訳語』における与位格接尾辞の書き分け規則について」（『言語研究』121、2002）は多くの点で興味深い事実を提示した論文であるが、「都^𑖀児」と「突^𑖀児」の書き分けも注目に値する部分である。与位格接尾辞「-dur/-dūr」は通常「突^𑖀児」で記されるが、わずかながら「nadur」「cimadur」など人称代名詞の後で「都^𑖀児」を用いる例がある。これについて栗林氏は先古典期文語において「nadur」「cimadur」が分かち書きされない例を挙げ、「-dur/-dūr」が（ウイグル文字において）前の語から分離して記されている場合には「突^𑖀児」と音訳され、接続して記される場合には「都^𑖀児」と音訳された可能性を示唆した。この説得力のある説を受け入れるならば、秘史の漢字音訳がウイグル文字本文に基づいて行われた有力な証拠と言ってよい。

8. まとめ

3節と4節において、服部氏が「パスパ字本原典説」の根拠とした γ/q の不区別は、漢字音訳においてもパスパ字蒙古語の表記においてもそれぞれ十分に起こりうる現象であることを述べた。すなわち漢字音訳がパスパ字表記に影響を受けたと想定しなくても、説明可能なものである。

さらに6節と7節においては、現行の秘史の成立に「パスパ字本」が関与したと想定することの難しさ、あるいはウイグル文字本から直接に漢字音訳がなされた可能性の高さを示した。

本稿に記したものが服部氏の希望した‘言語学的な’反証としていささかでも有効であれば幸いである。